吹田市
文化財ニュース

No. 10
平成元年３月15日
〒564 吹田市泉町1丁目3番40号
吹田市教育委員会
TEL.(06)384－1231

護国寺旧伽藍の発掘調査

吹田市教育委員会では昭和63年10月４日から11月19日にかけて、吹田市高浜町４－33に所在する曹洞宗護国寺の本堂、及び庫裏の建て替えに伴う発掘調査を宗教法人護国寺の協力のもとに実施しました。

護国寺は吹田市内で中世にまで創建が遡ることが知られる寺院の一つであり、当寺に伝えられる絹本著色般若菩薩像は鎌倉時代前期の作と考えられる優品で、国の重要文化財に指定されています(現在東京国立博物館に寄託中)。

当寺は康暦二年(1380)に僧竺仙得山が、師の高僧大徹宗令を開山として仰ぎ、自らは第二代として創建した寺で、当初は護久寺と称されました。康応年中(1389～1390)に室町幕府の将軍足利義満の祈願所となり、寺名も護国寺と改められました。時の権勢家との関係も深く、非常

▲検出された護国寺創建時の基壇(北東から)

▲調査風景

に栄えましたが、戦国時代に兵乱に巻き込まれて焼失し、その後、慶長五年(1600)、当時吹田村を領していた、旗本竹中重春の弟、重賢の菩提所として再興されました。昭和53年、本堂と庫裏が火災のため焼失し、今回の発掘調査は、本堂、及び庫裏の本格的な再建にともなうものとして実施されました。

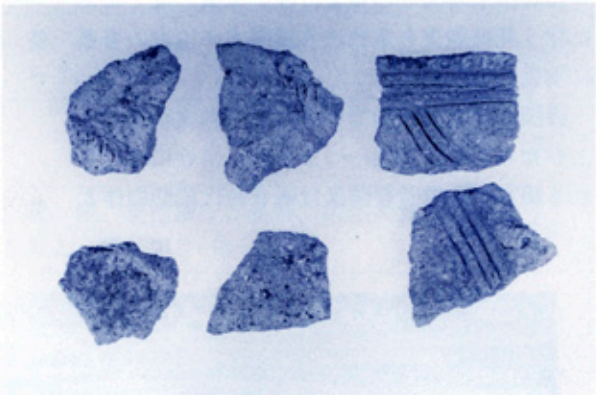
発掘調査は、現代の地表面から順次、慎重に掘り下げながら進めていきましたが、江戸時代の再建時以降、室町時代の創建時から戦国時代に焼失するまで、そして、護国寺の創建以前の状況が明らかにされました。

創建時の遺構は、建物の土台である基壇を確認しました。基壇は一辺10.5mを測る方形で、一部に残っていた石組の状況から外面に15～40cmの自然石を乱石積みにした基壇で、その周囲には素掘りの雨落ち溝を巡らしています。基壇上では多量の炭の堆積や焼けた礎石が認められたことから火災にあった事がわかり、出土した遺物等から、創建から戦国時代に焼失するまでの基壇であることが確かめられました。

▲基壇上の礎石検出状況(南東から)

火災にあったことや、近世の再建に伴う工事によって、創建時の基壇は大きく削られており、建物の規模、構造は不明な点が多いのですが、基壇の平面形や規模等から、禅宗伽藍の中心である仏殿の可能性が高いと判断されました。

創建時以前の状況は、当地一帯は吹田砂堆上にあたることから地盤は軟弱な砂層であり、雨水等の影響を大きく受け、小谷状をなす起伏の大きい地形を呈しています。調査では鎌倉時代の日常生活で使われた土器類が多く出土しており、建物跡等の明確な遺構は発見されませんでしたが、近くに大きな集落があったことが考えられます。



▲出土した縄文土器(中期の船元式土器)

中世の土器以外には、平安時代、弥生時代、縄文時代の遺物も出土しており、多くの問題を提起しましたが、特に縄文土器は中期の瀬戸内系のもので、市内で確認されたものでは最も古い時期の土器です。また、平安時代の瓦は平安宮の造宮瓦窯である吉志部瓦窯跡で焼成された物であり、市内では瓦窯以外では高浜神社境内地を含むこの一帯のみで出土しており、注目されます。

今回の調査は、本市において、初めての本格的な寺院の発掘調査であるとともに、高浜町周辺の旧吹田村中心部の発展の様子を伺い知ることのできた貴重な調査でした。

吹田における造瓦の変遷

鍋島敏也

5世紀のはじめ、わが国に渡来した人々のなかで、製陶の技術をもっていた人は、大阪湾に入航して千里丘陵や泉北丘陵をみた時、そのなだらかな起伏と豊かに茂る樹林をみて、これこそ製陶の地に相応しいと直感したに違いない。

千里丘陵や泉北丘陵ではじめて「陶器と呼ばれるやきものである須恵器」が焼かれたのはこのようなことが原点にあったと考えるのは単なる夢なのだろうか。よしんばそれが夢であるとしても、千里丘陵の最も大阪湾に近い吹田32号須恵器窯跡(朝日が丘町)で、初期の須恵器が焼かれたのは厳然とした事実であり、千里丘陵の須恵器窯の経営はここから拡がってゆく。

このように千里丘陵に深く根を下ろした製陶の技術は、7世紀に至って全国に波及した寺院建築の時代に、吹田に定着した「須恵器焼成」の技術が「屋瓦焼成」に変転してゆく。短絡的に表現すれば、初期の瓦窯は須恵器窯に、瓦を並べよくする階段を取りつけたものに止まっているのは、それを示唆していると考えることができる。しかし注意してみると、燃焼室などの改良があることはいうまでもない。

わが国の建造物で最初に屋瓦を使用したのは一般に588年に建立が始まった「飛鳥寺」とされ、

▲32号須恵器窯跡

千里丘陵で最初に屋瓦を用いた寺院は茨木市にのこる「穂積廃寺」(白鳳時代)とされている。

穂積廃寺から出土する瓦は、吹田市山田の「白頭瓦窯跡」から出土する瓦と同形であると早くから指摘されてきた。白頭瓦窯跡は大阪府教育委員会の発掘調査によると、不幸にも跡形もなくなって、その形態を探究する手だてもないが、やがて平城京の時代に入ると、神亀年間から造営が始まって天平時代には皇都ともなった聖武朝難波宮の造営にあたって、それまで吹田の地が細々ながらも維持してきた製陶地としての立地が注目された。

この時、瓦窯の経営の場として選定されたのが、七尾(岸部北5丁目)の独立丘陵で、その端に瓦窯(七尾瓦窯跡)が構築される。ここでは総数7基の瓦窯が確認され、発掘調査された3基のうち2基は明らかに「登り窯」であり、1基のみが「ロストル」をもつ以前の段階の「平窯」であ

▲七尾瓦窯跡 2号瓦窯

った。

３基の窯がそれぞれ異なる様態をもって構築されているのは、この瓦窯経営のために召集された造瓦工達が統一した技術を保有するまでに至っていなかったからではないだろうか。

降って８世紀の終わり頃、「平安京」の造営が始まると、一時断絶したかにみえた造瓦がまた始まった。そのところは、七尾瓦窯跡に近い岸部北４丁目の紫金山で、丘陵の中腹を平坦にして、その端にロストルつきの平窯を整然と並べて構築していた。その上部には緑釉をかける窯が構築されていて、総数15基にも及んでおり、その中心にある吉志部神社の名称によって、「吉志部瓦窯跡」と命名された。

吉志部瓦窯跡は最近の調査によって、前方の平坦部において、粘土採掘坑のほか工房跡なども発見され、窯跡を含む「造瓦工房」としての全容が次第に明らかになりつつある。特に、この瓦窯跡で注目されたのは、後述する近代瓦窯に継承されていった「ロストル付平窯」の形式が主体となったことである。

山田白頭の白鳳時代瓦窯も、七尾の天平時代瓦窯も、紫金山の平安時代瓦窯も、その立地は五世紀に渡来した製陶技術者が着目した、

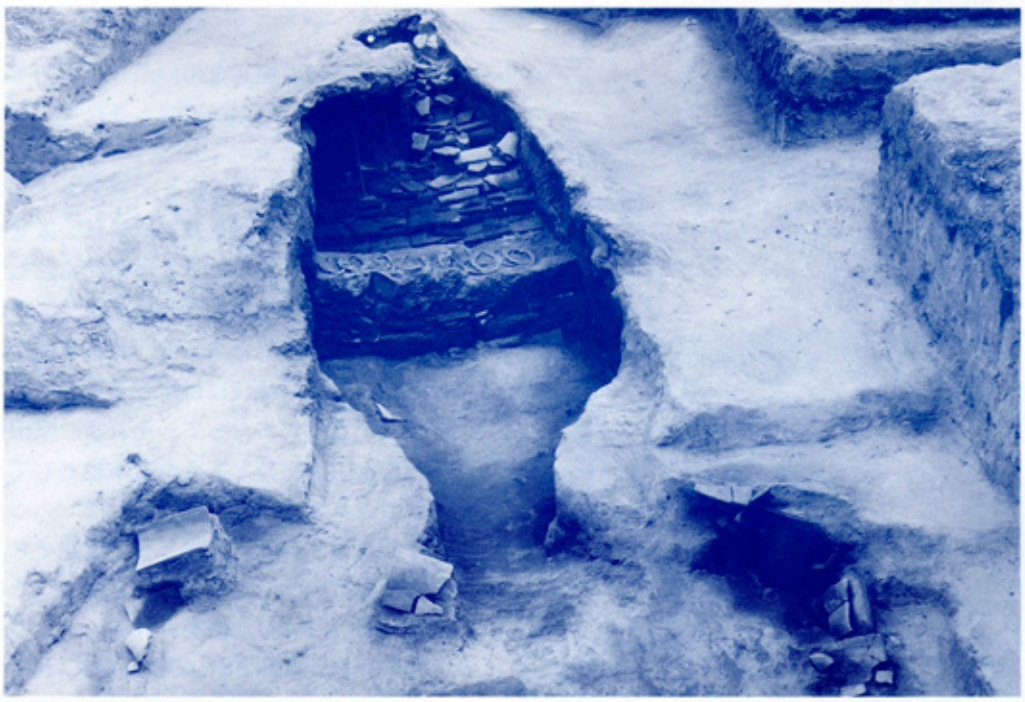
豊かに茂樹林とその下に眠る良質の
粘土、いくつにも開析した谷

が経営の基盤になっており、そこで培われた須恵器生産の技術が、この造瓦の技術に繋がっていったに違いない。

須恵器生産に始まる窯業が造瓦に進展していった過程はほぼ以上のように考えられるが、吹田における造瓦の歴史は、吉志部瓦窯の閉鎖によって、プッツリと断絶し、近世初めの築城盛行期を迎えて、大坂城の用瓦を焼いたと伝えられる「武内(竹内)瓦窯」の出現をもって、復活したと考えられる。

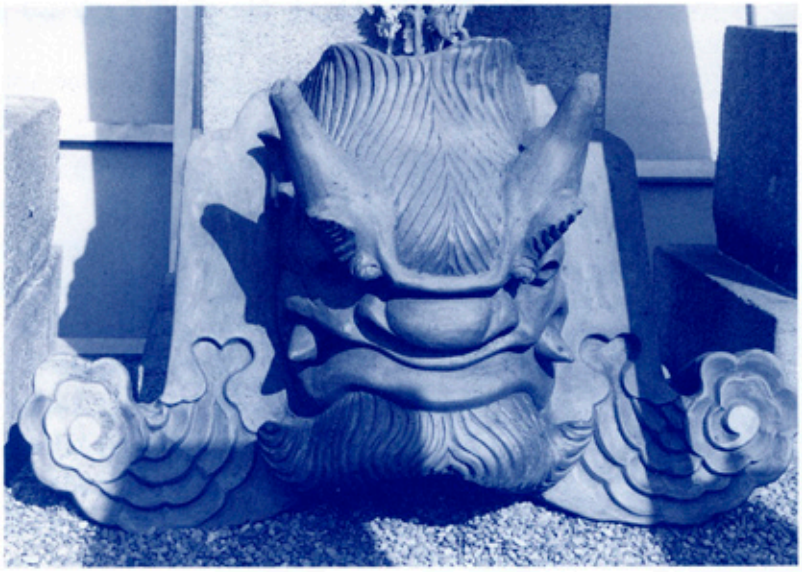
現在の時点で、竹内瓦窯の開窯時を明確にすることはむづかしいが、南高浜町の正福寺にのこされた古瓦には、

宝暦三癸酉年十月（1753）
摂州嶋下郡天道
瓦師竹内七兵衛



▲七尾瓦窯跡 ３号瓦窯

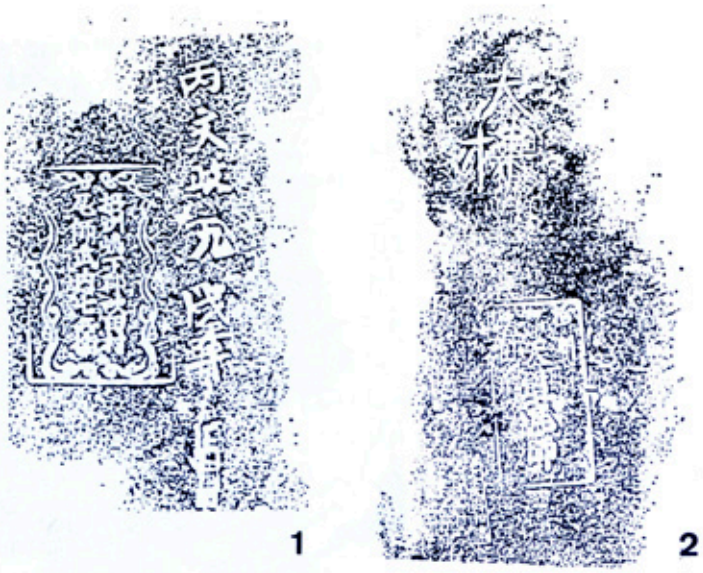
▶正福寺に残されている鬼瓦



▼鬼瓦の宝暦年銘

鬼瓦側面の瓦師銘▶

▲正福寺に残る近世の瓦の刻印



▶市内に残された近世瓦銘
1．中西家（岸部中）、文政九年ほか
2．高浜神社（高浜町）、大棟ほか

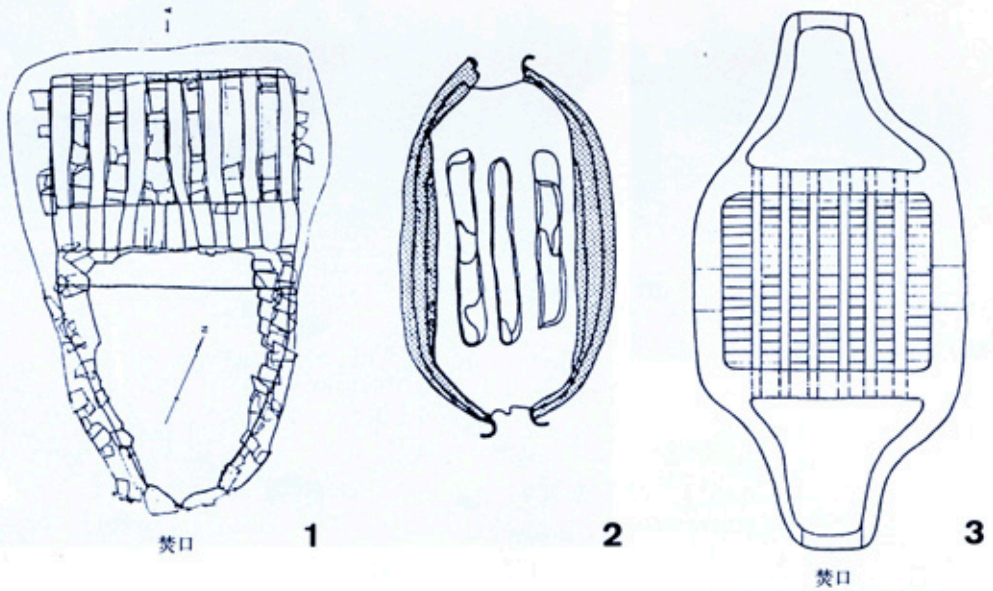
の文字が釘書きしてあり、すくなくともこの時期に、吹田の造瓦は復活していたといえる。いままで散見した資料には、文政・天保期のものが多く、それらは寺社に止まらず、一般民家からも発見される。江戸中期からの瓦葺の奨励政策の浸透をみるようである。

しかし、これらの瓦生産も、

天道の武内瓦窯は昭和２年に

岸部の鈴木瓦窯は昭和42年に

時代の波に押されるように閉窯されていった。



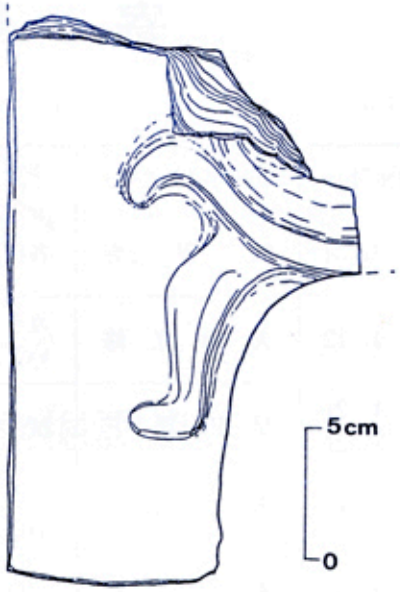
▲瓦窯の変遷（縮尺は不統一）
1. 吹田市吉志部瓦窯跡Ｈ１号窯（平安時代）
2. 宝塚市旧清荒寺（室町時代）
3. 吹田市鈴木瓦窯（近　代）

鈴木瓦窯の構造は閉窯の時期においても、吉志部瓦窯跡のものとは基本的に同じではあるが、ロストル付平窯の焚口を、前後双方に配置して、火の回りを充分になるように、改良したものであったことは注目すべきであろう。このような焚口を２カ所もつ形式の瓦窯がいつから採用されたかどうかは不明である。

おそらく古代においてみられない形式のようであり、また、宝塚市の旧清荒寺において、桃山時代の瓦窯として、同じものが現れていたから、この中世の間に窯の改良が行われたのであろう。そして、近世には、このタイプの窯が一般的であったことは、この鈴木瓦窯や竹内瓦窯、そしてそれ以外の近在の瓦窯をみても明らかである。

最後にわたしがこれまでに散見した近世以降の紀年銘などのある吹田産の瓦を紹介する。

（なべしま　としや　府文化財愛護推進委員）



▲護国寺出土の鬼瓦片（室町時代）

1989. 2. 2.　現在

瓦の種類	生産地	瓦師名	紀年銘	記事
平瓦	岸部村	惣吉		
〃	吹田村	武内七兵衛	文政七年（1824）	
〃	〃	〃	文政九年（1826）	
丸瓦	岸部村か	岸駒		多数
鬼瓦	吹田村	竹内七兵衛	宝暦三年（1753）	
〃	〃	武内七兵衛	文政十二年（1829）	2個
〃	〃	〃	天保十三年（1842）	
獅子口	〃		天保十年（1839）	
〃	〃	武内和流	天保十二年（1841）	
〃	天道	直次郎		
飾獅子	吹田村	武内恒吉		

寄　贈　民　具

（昭和63年３月10日より平成元年２月15日現在）

寄贈年月日	寄贈者（敬称略）	寄　贈　品　名	（数量）
63. 3. 24	明　誓　寺	各種瓦	135点
63. 4. 12	大　山　立　修	カラウス、ランプ、馬の鞍、トコロテン用具、こたついこ、瓦の型 他	16点
63. 4. 21 63. 7. 21	早　田　隆　三	桶、衝立	２点
63. 5. 17	山　本　いさ子	炭火おこし、ポンチ、たたき台、金床、木づち、直切金鋏曲切金鋏、万力、墨つぼ、墨さしなど板金用具	42点
63. 6. 30	北　田　祐太郎	石臼、鳥かご、むしろ編み機、警防団鉄かぶと、俵千歯こき、釜、くつご、うなぎがま、発動機 他	14点
63. 6. 30 63. 7. 30 63. 8. 4	増　成　文　子	行季、時計、釜、茶釜、鍋、ぞうり、そろばん、すだれ酒燗器、枡、ちぎ、つちのこ、人形 他	83点
63. 7. 21	浄　光　寺	瓦、駕籠	10点
63. 7. 30	奥　井　正　樹	タロミ、鋤、箕、鍬、麦摺機など農具、用心太鼓、枡とっくり、おおこ、押し切り 他	21点
63. 7. 30 11. 22	下　谷　トシ子	単衣着物、袷着物など衣類、湯伸器、たらい、くし高下駄、伸子針、火鉢、張り板 他	17点
63. 7. 30	都　築　茂次郎	やかん	１点
63. 9. 28	松　浦　　章	蚊　帳	１点
63. 11. 4	桶　上　久　弥	板ナンバ	１点
63. 11. 22	井　場　輝　夫	オワリグワ、備中鍬、アイグワ、金鍬など農具、燭台水筒、酒燗器、杵、膳 他	30点
63. 11. 25	樋　上　英　夫	舟	１点
63. 12. 8	池　田　則　保	オワリグワ、じょれん、金鍬、フォーク、鋤など農具ふりにがい、俵じょうご、杵、俵編み 他	18点
元. 1. 26	岡　本　文　子	竿ばかり	１点

御協力ありがとうございました。